

現代社会における葬送儀礼

孝本 貢——聞き手・栗原淑江



葬儀見直しの風潮について

栗原 ここ数年、「葬送の自由をすすめる会」によって自然葬が提唱されたり、友人葬・音楽葬・生前葬等のさまざまな葬儀が行われるなど、従来の伝統的な葬儀のあり方を再検討しようとする風潮が高まっています。孝本先生は、長年にわたって先祖祭祀や墓の問題を研究されてこられたが、そうしたお立場から、昨今のそのような風潮をどうお考えになられているでしょうか。その点について、まずおうかがいしたいと思います。

孝本 確かに近年そうした傾向がみられますが、実はこれはけっして新しい現象ではありません。葬儀のあり方、葬式仏教への批判は明治の初期や大正期、昭和初期にもあったもので、最近また強くなってきました。私は、この問題は、二つの面から捉えられると思っています。

ひとつは、日本の仏教は「葬式仏教」に成り下がり、信仰、戒律をおろそかにしているとして、「仏教墮落論」という思想的流れがずっと受け継がれてきていると思います。『友人葬を考える』⁽¹⁾でも指摘されているように、

仏教が、政治権力に従属させられ、さらには仏教団自体が自らの権力をつくり上げ、富と権力を守っていく中で、庶民を収奪する手段として葬式を使うという、いわゆる仏教団の理想像から乖離しているという問題として出されていったものであります。

もう一方では、「仏教墮落論」がたびたび唱えられていっても、庶民が檀家寺として仏教を受け入れていった、仏教の日本化の現象というものがあります。仏教自体が社会的、時代的なものです。インドで釈迦によってつくられ、中国で変質をして、日本に入ってきた。庶民の中



孝本 貢氏

この二つの面は分けて考えていったほうがいいと思うんですね。

栗原 後者は、仏教が、葬儀という形で庶民のニーズに応えてきたという側面ですね。

孝本 そうです。神社というのは穢れを扱わないですが、仏教が穢れを扱ってくれる。死体を放置していたのが、近世になってイエが自立すると、身内の死者を懇ろに葬りたいという希望が出てくる。だけど葬る時に死体は穢れている。そうすると、穢れを処理するやり方をどうするのか。さらには浄土信仰によって成仏できることを望む。そこで、仏教の僧侶なりお寺さんなりと結びつくというのがあったと思うんですね。

「葬式仏教墮落論」においては、ある意味で、葬式の様式を変えれば解決できる問題だけれども、葬儀そのものの根本からもう一回考え直すとなれば、小さい問題ではなくなるでしょう。単なる儀礼様式の改善による解決だけに留まらなくて、成仏をどうとらえるのかという問題も含み込むことになります。

この間、たまたま創価学会の友人葬に参加しましたが、



栗原 淑江氏

に仏教が本格的に浸透したのは、葬儀の問題に関わるようになった近世からだといえます。それまでは、一般の庶民にとって仏教はあまり関係がなかった。それが庶民の日常生活まで仏教が係わりをもつてくると、当然、日本的な仏教に変わってきた。儒教もそうですが、外来思想を日本社会にうまく取り込んでいって、積極的にそれを生かしていくというのがあります。日本は島国ですから、古来から、外来思想を積極的に取り込んで、それを常に日本的に変え、教え、思想を根づかせていったという側面があると思います。

火葬場に行つて遺骨を家に持つて帰ってくる。その時に出てくる発言というのは、「骨が綺麗だった」ということでした。

栗原 ええ、よくいますね。白い骨だったとか。

孝本 そう、成仏されたというわけですね。そういう成仏されたというのは、本来仏教の釈迦の時代の教えではないのだと思います。そこで成仏といった場合には、たとえば佐々木宏幹先生が『仏と霊の人類学』において、日本でのホトケは仏教的に意味づけされた「仏」と、一方では民俗的な意味での「死霊」、「祖霊」として捉えられる両義性を具えており、それが仏教と民俗を媒介する弾力性をもち、日本仏教の最重要のチームとなっていると主張されています。民俗世界においては、死者霊は葬送儀礼、度び重なる年回忌儀礼を受けることによって、徐々に成仏過程を遂げていくという信仰があると思います。だから、そういう深層レベルまで変えていくっていうのは、日本の基層文化そのものを問い直していかねばいけないということです。そういう意味では壮大な試みになると思います。

またひとつには、現代の葬祭の問題があると思います。たとえば、献体をめぐる興味深い話があります。今は、献体が非常に増えて、病院の方で逆に困っているそうです。病院に献体したいと持つていく。いずれは病院と契約しているお寺さんと葬儀を行う。死後に死者の爪とか髪の毛をおさめて葬儀を行う場合もありますが、最終的には骨が出る。そこで、葬儀をやるうとして遺族に連絡しても、遺族が来ない場合が相当あるらしいです。子供が親の葬式をしなければいけないという意識が薄れている。また葬式をできないような状況も出てきます。従来の共同体社会だったら、子供、跡継ぎがちゃんと葬式をやらなくては行かなかったのが、崩れていったのだと思います。子供をあてにできないので、生前に戒名をつけておいて、お墓にも刻んでおいて、いつ亡くなってもいいようにするという例も増えているといわれています。そのように、葬儀自体が多様化するし、自分の考え方に基づいてやってもいいし、やらなくてもいいし、やる場合にもいろいろなやり方がでてくるのだと思います。その時に直面して、どのようにしたらよいか解らないと



対話中の両氏

いうことが大きな問題だと思っています。

栗原 最近、伝統的な形態にこだわらないさまざまな形の葬儀が行われる背景には、イエ制度や共同体の崩壊という社会的な問題があるわけですね。

孝本 共同体内で、葬儀・その後の儀礼の様式が代々伝えられ、こうやるものだとか村の長老などから教えられてきていたものが、今はそれを伝承する基盤がない。そうすると、いざ近親の死に直面した場合には、伝承がない。そうするとひとつは、葬祭業者に依存してしまう。それではだめだという場合には、「葬送の自由をすすめる会」のように、自ら模索していかざるをえない。葬儀が多様化する中で、ある自分のやり方で執り行いたいなり、残された者の価値観でやろうとする場合に、そういう受け皿のひとつとして、このような会が創られていったと思います。しかし、まだ圧倒的多数は、いわゆる葬儀社を介しての伝統的な葬式に依存していると思います。

戒名について

栗原 創価学会の場合には、今回のいわゆる宗門問題

の過程で、従来の葬儀のあり方の再検討が始まったわけです。その基調は、故人を思う真心や生前の信仰を強調し、葬式仏教化してしまった既成仏教を批判するというものです。他に、新宗教教団などで葬式仏教を批判した例がありますか。

孝本 たとえば、既成仏教批判を伴って宗教運動を展開した事例のひとつとして、昭和の初めに創設された霊友会があります。そこで、「金欄の袈裟衣をかけても、腹わたが腐っていたんでは、仏はご守護にならない」と批判し、自らの先祖に対して、自らが供養するという思想が打ち出される。そして、すべての先祖に対して「生・院・徳」という決まった法名をつけ、平等に供養する。お坊さんの檀家寺との関係を切るということとはしてないんですけども、金欄の袈裟を着ていても心が腐っていたらだめなんだと、強烈な仏教批判をして、特定の修行をし、霊的力をもった人が法名をつける。それを毎日供養するというやり方で、霊友会系は勢力を伸ばしていった。栗原 戒名の問題は、島田裕巳氏の『戒名⁽³⁾」をはじめとしてずいぶん話題になっていますが、もう少しその意

義等についてお教えてください。

孝本 葬儀というのは、ひとつの通過儀礼と捉えてよいと思います。七五三でも、神の子というか、七歳まで神の子として取り扱われ、七五三の儀礼をすることによって人になる過程を経る。そこで変身をするわけですよ。ね。葬祭儀礼も生者から死者への変身という形になるかと思っています。それは、オームス・ヘルマン『祖先崇拜のシンボリズム』⁽⁴⁾において、通過儀礼と死者儀礼がみごとに対応している姿を描き出しています。

また、子供の名前にしても、幼名から大人名、さらには襲名というように名前自体を変えていくということが日本の社会においては、特に明治以前にはあります。さらに、もし、家に不幸が続けば、その戸主とか長男の名前を変えるということもみられます。通過儀礼の節目ごとに名前を変えていくということが、民俗的な発想に流れています。それが近代になって、戸籍法によって生者の名前を変えることが非常に困難になり、生涯同じ名前ということが定着していった。変身して名前を変えることについては、唯一残ったのが戒名であると思います。

という面が目立っているということが、現在の戒名見直しの風潮の背景となっているのではないかと思います。また、葬儀は、残されたもののためという側面もありますね。

孝本 そう、残されたものが葬儀の中で、喪主を誰にするのかとかによって、伝統的なイエの継承者を社会的に認知するそういう役割もあるでしょうし、その儀礼によって、その家なり、その集団の社会的なステイタスを再確認させるという、そういう面もあると思います。単なる死者を葬るための儀礼ではなくて、それにいろんな機能が入り込んでいます。今日ですと、たとえば会社葬では、会社の社会的な位置を再確認させるとかです。それが一般の社員の場合にはそれぞれの家庭でさせる。どのレベルからは会社で執り行うという慣行があると思います。

葬祭儀礼そのものは個人の死者の通過儀礼の側面とともに、そういう、残された人をなぐさめる、いわゆるブリッヂファンクションの機能をする側面もあるし、儀礼を通して集団の社会的な認知の再確認をさせる機能もあ

戒名は、ある意味で変身して、そこで成仏への道が開かれたことを生者に向かって、明らかにすることだだと思います。戒名は、そういう機能を持っているんだと思います。

栗原 戒名は日本だけです。

孝本 日本だけです。中国もないし。韓国にしても、中国にしても、俗名で位牌などに書いている。ヨーロッパは洗礼のときに、クリスチャンネームで変えます。そこで、ある意味で救済の道が開かれています。

栗原 かつては生前にもらう法名だったのが、江戸時代に檀家制度の中で死後戒名になっていった……。

孝本 そういう考えを、お寺さんのほうでうまく利用していった。もちろん儀礼ですから、僧侶が檀家の確認、さらに収奪のために戒名をつけたというより、戒名を付与することが、顕在的な機能なり潜在的な機能を持つてきます。たとえば葬儀にしても、そういう、死者の通過儀礼としての側面があります。

栗原 そのような戒名の意義と機能が、今日ではあまり意識されず、形骸化してしまい、僧侶の金儲けの手段

るんですね。そうすると、たとえば戒名にしても多面的機能が付与されています。その集団の社会的な認知を再確認させるという面で、その人の家なり、ステイタスを示すことになります。すると、短い戒名だったら駄目だとかになります。戒名を、お坊さんが金儲けのためだけに利用しているものだとしたら、今まで庶民が葬儀という儀礼に対して思い入れをしていたということを潰してしまうことになります。

その側面で、戒名をどうするのかということ。都市社会において寺檀関係は非常に希薄になり、教団の収奪論が突出していると思います。しかし、人々に受け入れられて批判をされながら生き延びてきているというのは、やっぱり受け入れる素地があったからだだと思います。

創価学会の「友人葬」

栗原 戒名の問題を含めて、創価学会は今まで葬儀の問題をあまり意識していなかったかもしれません。葬儀だけでなく、七五三や結婚式などの儀礼も寺院で行うの

が慣例となっていました。それに対し、在家だけの新宗教教団は、最初から僧侶抜きで儀礼を行っていたということですね。

孝本 そういう意味では、創価学会は、ずっと日蓮正宗の僧侶に依存していたことが乗り越えられなくて、最近問題が出てきたと思います。もし分離した場合には、創価学会独自のやり方をどうしていくのか、それが、非常に問題になってくるんだと思います。

栗原 創価学会は、さきほど話にも出ましたように、現在「友人葬」という形で、僧侶を呼ばない葬儀を行っています。これは、僧侶主導の葬儀を見直し、在家が自らの手で執り行つてゆこうというものです。ある仏教学者は、この試みを、「儀礼は在家で、僧侶は自分の修行を」とする釈迦の教えにもかなったものだと言指されていきます。先生は、こうした試みについて、どうお考えでしょうか。

孝本 「葬送の自由をすすめる会」などのような私的な小さい勢力でなく、大きな勢力として日本社会にある学会が問題提起したことは、相当なインパクトがありま

な付き合ひがある。それをどうするのか。

栗原 現在は主として、儀典部というセクションに属する会員が導師をつとめています。日頃から故人やその家族と親しい場合が多いので、真心の込められた葬儀になったという感想が多くきかれています。背広姿にもほとんど違和感はないようです。

孝本 それと、創価学会の友人葬だからといっても、創価学会員だけが来るわけではない。葬式には、未信者の方が多くわけです。そういう未信者の人たちにも、何かまだ違和感があると思うんですね。戒名を見ても俗名ですしね。俗名でいいっていうのが決してはつきりされていないです。ごく最近までは、学会は日蓮正宗の信者として正宗式の戒名に変えていたわけです。それで安定できるような思想はできているか、私はまだできていないと思います。

さきほどいったように、霊友会の場合には、そこでもう皆平等だと、院号法名をつけて、それによって解決の道を出したと思います。それを今度は創価学会の方では戒名とはどのように位置づけるのか。それはつけない場

ですね。日本的仏教を射程に入れて、救済の側面にどう切り込んでいくかが問われていると思います。

栗原 実際に列席されて、どのような感想を持たれましたでしょうか。

孝本 ひとつは、学会の会員は相当多いですね。ちょうど昭和三十年代から四十年代の初めくらいにどんな人会した人が多いんだと思います。そうするとその年令がどんどん上がっていくと、これからどんどん葬式が増えていく。この前は県長とか婦人部長とか、そういう人が導師をしてましたが、会員が高齢化すれば毎日葬式に出歩かなくてはいけなくなる状況が生じてくるでしょう。

導師をつとめる方たちが世俗の生活を放っておいて、毎日出なくてはいけなくなつて、生活はどうするのかということになります。それが、専門職になったら、僧職と同じ位置になります。今までの創価学会と意味が違ってきて、それも大変だなと思いました。

毎日それこそ、葬儀で出なければいけないとなると、その人にとっては仕事がないといっても、いろいろ

合にも説明が求められていると思います。

結局、信仰をずつとしていたら成仏するんだと説いても、それは確信がないわけです。特に、自力の立場であれば、どこまでいっても信仰は無限度で、どこまでいけば信仰が完成されたという到達点はないものです。そうすると、その人は死ぬまでお題目を唱えていたが、どこかで変な考えをしながらお題目をしていたとか、あの人はお題目は熱心だけど酒飲みだとか。そうした場合には、戒名をつけさせることによって、生き残った人が、あの人は成仏してくれて、今度は、荒魂あらみたまとしてこの世に未練を残している存在からだんだん成仏してもらつて、供養していつて、今度は和魂にぎみたまとなつて守ってくれる霊になってくれるということだと思っています。

栗原 それをきちつと目に見える形で保証する……。

孝本 そうだと思います。戒名は、変身を具象化した、葬儀などに参列した人に対して、あの人はこういう人だったのかを戒名によって、たとえば徳のある人とか知識のある人であるとかをシンボル化していきます。それを皆に納得させていくんですが、俗名にはそれが無いんで

が慣例となっていました。それに對し、在家だけの新宗教教団は、最初から僧侶抜きで儀礼を行っていたということですね。

孝本 そういう意味では、創価学会は、ずっと日蓮正宗の僧侶に依存していたことが乗り越えられなくて、最近問題が出てきたと思います。もし分離した場合には、創価学会独自のやり方をどうしていくのか、それが、非常に問題になってくるんだと思います。

栗原 創価学会は、さきほど話にも出ましたように、現在「友人葬」という形で、僧侶を呼ばない葬儀を行っています。これは、僧侶主導の葬儀を見直し、在家が自らの手で執り行つてゆこうというものです。ある仏教学者は、この試みを、「儀礼は在家で、僧侶は自分の修行を」とする釈迦の教えにもかなったものだ指摘されています。先生は、こうした試みについて、どうお考えでしょうか。

孝本 「葬送の自由をすすめる会」などのような私的な小さい勢力でなく、大きな勢力として日本社会にある学会が問題提起したことは、相当なインパクトがあります。

な付き合ひがある。それをどうするのか。

栗原 現在は主として、儀典部というセクションに属する会員が導師をつとめています。日頃から故人やその家族と親しい場合が多いので、真心の込められた葬儀になったという感想が多くきかれています。背広姿にもほとんど違和感はないようです。

孝本 それと、創価学会の友人葬だからといっても、創価学会員だけが来るわけではない。葬式には、未信者の方が多くわけです。そういう未信者の人たちにも、何かまだ違和感があると思うんですね。戒名を見ても俗名です。俗名でいいっていうのが決してはっきりしていないです。ごく最近までは、学会は日蓮正宗の信者として正宗式の戒名に変えていたわけですね。それで安定できるような思想はできているか、私はまだできていないと思います。

さきほどいったように、霊友会の場合には、そこでもう皆平等だと、院号法名をつけて、それによって解決の道を出したと思います。それを今度は創価学会の方では戒名とはどのように位置づけるのか。それはつけない場

すね。日本的仏教を射程に入れて、救済の側面にどう切り込んでいくかが問われていると思います。

栗原 実際に列席されて、どのような感想を持たれましたでしょうか。

孝本 ひとつは、学会の会員は相当多いですね。ちょうど昭和三十年代から四十年代の初めくらいにどんな人会した人が多いんだと思います。そうするとその年令がどんどん上がっていくと、これからどんどん葬式が増えていく。この前は県長とか婦人部長とか、そういう人が導師をしてましたが、会員が高齢化すれば毎日葬式に出歩かなくなっていく状況が生じてくるでしょう。

導師をつとめる方たちが世俗の生活を放つておいて、毎日出なくてはいけなくなつて、生活はどうするのかということになります。それが、専門職になつたら、僧職と同じ位置になります。今までの創価学会と意味が違つてきて、それも大変だなと思いました。

毎日それこそ、葬儀で出なければいけないとなると、その人にとっては仕事がないといっても、いろいろ

合にも説明が求められていると思います。

結局、信仰をずつとしていたら成仏するんだと説いても、それは確信がないわけです。特に、自力の立場であれば、どこまでいっても信仰は無限大で、どこまでいけば信仰が完成されたという到達点はないものです。そうすると、その人は死ぬまでお題目を唱えていたが、どこかで変な考えをしながらお題目をしていたとか、あの人はお題目は熱心だけど酒飲みだとか。そうした場合においても、戒名をつけさせることによって、生き残った人が、あの人は成仏してくれて、今度は、荒魂あらたまとしてこの世に未練を残している存在からだんだん成仏してもらつて、供養していつて、今度は和魂にぎたまとなつて守ってくれる霊になってくれるということだと思います。

栗原 それをきちつと目に見える形で保証する……。

孝本 そうだと思います。戒名は、変身を具象化した、葬儀などに参列した人に対して、あの人はこういう人だったのかを戒名によって、たとえば徳のある人とか知識のある人であるとかをシンボル化していきます。それを皆に納得させていくんですが、俗名にはそれがありません。

すよね。そういう意味では、どういう人であったのかを示す材料がないと思います。

仏教式の戒名は一字だけで——「徳」とか「知」だけで——皆が納得するでしょう。それ以上は、人柄、生き方、人格を問わないとする。それでいずれば、たとえば、いくら酒飲みであって夫婦で喧嘩をしていたとしても、あの人はいいところがあつたのだと。それで戒名はこの字をつけたのだと、それで皆守ってくれるんだとなりますが、俗名では世俗生活の姿が消えない。全部良い側面も悪い側面も永遠に残っていきます。そういう意味では、俗名で通すとなると、それを説明する理由がいると思います。

俗名でもいいとは思いますが、生前どのような人であっても、いずれは神、仏になって守ってくれるんだと、そう社会のシンボルとして戒名があります。だから、そのところも考える必要が出てくる。

栗原 現在のところ、戒名なしで不都合だったという意見はほとんどないようです。むしろ俗名の方が親しみがある、真心が込められている声が多くあがっています。

つの合葬墓を造る場合もあります。そこに一緒にお骨を納骨し、祭祀をする。それは国柱会の場合にみられます。信仰を共通するものがお骨を納めればいいんだと。それは近年ではなくて、まだイエが生きている時代にそういう恰好になっています。

お墓そのものにしても葬式のやり方も信仰共同体でやるんだ、その後の祭祀も信仰共同体でやるんだという一貫したシステムを持てば、論理的には完結するし、そして、それはけっして日本人に受け入れられないものではないと思います。個別の祭祀については家庭でやるとしても、遺骨は共同で祭祀できるし、そのほうが、ある意味で望まれる場合もあると思います。

栗原 日本人の場合、遺骨に関する執着はかなり強いといわれますね。

孝本 たしかにそれは強い。骨が靈魂のシンボルとしてみられています。たとえば日本人だけ戦地に行って遺骨の収拾をやりました。だけど、その骨は永遠にその家が囿うのかといえ、そうではないです。結局、骨を靈魂の依代として持つてくる。そして、今度は自分たちの

「変身」についても、戒名よりも「生前の信心」が大切だという考えが浸透しているせいか、あまりこだわりのないようです。ただ友人葬もいわば過渡期ですので、ご指摘の社会的な意味も含めて、今後さらに明確にしていかなければいけない点もあると思います。

墓について

孝本 創価学会の場合には、今まで沢山造ってこれたお墓の問題をどう位置づけるのか。創価学会も「——家」墓を造ってこられたですね。

栗原 そうですね。イエ墓ですね。

孝本 そうすると、家を単位にしたものから、信仰を単位にしたものに変えていくのか。それも可能だと思います。日本の場合、けっしてイエ墓だけのお墓は成り立たたのではなく、多様なものがあります。たとえば、新潟とか北陸地方の真宗地帯に多く見られるように、村とか寺を単位にした納骨堂を造立した場合もあります。

そういう意味では、イエ墓というよりも、その村、寺を単位にした合葬墓です。それから、宗教教団がひと

お墓に祭祀をして完結する。骨自体は、そこで土にかえます。位牌もそうですね。何年かたてばお墓に埋める場合もある。それで自然にかえていくことが望ましいと観念されています。

驚いたのは、大正五年ぐらいに、新潟県の糸魚川市のひとつの村落で、出稼ぎの人たちが多い、あまり裕福なところではないんですが、それまではイエ墓が結構あつたらしいが、それを全部掘り起こして、大きな村墓を造ります。その村墓に深い穴を掘って、遺骨はその墓の裏の入口からどんどん入れます。

昭和五七年頃、お墓が崩れそうになって改築されます。その時、糸魚川から転出していつている人もいるわけですが、一人だけ自分の家族のお骨を持っていきたいという人がいた。ところが何もないわけです。そこで墓の底の土を骨のかわりに持つて帰らせたという。

そういう意味では、近代になってイエ墓として完全に固定して、この墓はこの家の墓であって、この家の子孫がこの墓を祭祀しなければいけないということが強くなったと思うんです。それは明治民法の祭祀財産の承継が

跡取りの特権事項となり、「イエ」の枠組みを国家が規定していったことにも求められると思います。

栗原 大正五年にそういう運動があったというのは、興味深いことですね。その場合、宗教的な裏づけはどうなんでしょうか。

孝本 それは特に関係ありません。だから今は、毎年お盆の時に、神社が神主一人と、関係する檀家寺十三ヶ寺の僧侶が一同に集まって——真宗が多かったですが——合同で供養する。

同じ信仰を持つ、たとえば創価学会でもいいですね、創価学会の信仰を持つ人が、ひとつの祭祀や墓のシステムをつくり、皆で守っていくということになれば、それはひとつの道だと思います。創価学会員が既存の檀家寺とうまいかなくて、結局どんだん自らの家のお墓を造り、イエ墓になっていっていますが、それをもう一度再編する道もあると思います。

栗原 国柱会のように、信仰を同じくするものが合祀をする、という発想ですね。

孝本 それ以前は、本願寺とか高野山とかは喉ぼとけ

れども、そういうこと以上に興味深いものだと思います。

先祖祭祀について

栗原 次に、先祖祭祀というか、年忌法要というか、一周忌、三回忌、七回忌、……五十回忌などについてはいかがでしょうか。

孝本 それは大正大学の藤井正雄先生などが、専門に研究されています。ある意味で、荒魂から、おだやかな魂になるんだという世界観があつて、そこに、年回忌などの仏教的儀礼を執り行うようになり、中国仏教的なものから日本的になってきたといえます。そしてそれが、お坊さんの生活の糧にもなってくる。

死体が穢れたものであつて、死者はこの世にいろいろ未練を残したり、恨みを残したりする存在であつて、それが、段々おだやかなホトケとなり、さらには先祖霊として守護神となり、子孫を守ってくれるという、その一連の儀礼であるといえます。お坊さんの方でそれを発見して、つくって、庶民を縛っていったということもありますが、民俗信仰が基底にあるといつてよいでしょう。

などの分骨を行う慣行があります。しかし、国柱会はそれとは違って全骨を納骨することもあります。それによつて無縁仏も防げるし、そういう意味では安心感を与えていると思います。

そういう側面を、日本人の伝統的な文化は持っているんだと考えています。それが近代になって政治権力なり、国家権力なりによつてどんどんイエが強調され、天皇制を支える基底としてイエが打ち立てられ、イエは絶対的なものだと観念されてきたと思います。自分のイエというのは所詮いろいろなイエと結びついた中でしか成り立たないんだと。そうすると祭祀の仕方についても、皆で守ってきたという面が崩されてきたともいえると思います。

栗原 昨今、墓地不足がいわれ、一方では墓地造成が環境破壊を引き起こすとの苦情も出ています。平面墓地は限界だとの声も聞こえる中で、合祀や、墓地の存在を否定するような自然葬（散骨・散灰）の試みも行われ始めています。そうした中で、ご指摘のような、同じ信仰に基づく合葬墓というのは、環境問題対策もありますけ

栗原 それが現代のように、イエ制度も崩壊し、皆都心に出てきたりすると、今までは当然のごとく親類が集まって行っていたけれども、それがだんだん重荷になってくる。そうした祭祀自体が難しくなってくると、本当にやらなくてはいけないんだろうか、というような考えも出てきます。その時だけ親戚が集まれてよい、という世俗的なこともありますけれど。

孝本 儀礼というのは、宗教的な意義だけではなしに、他の機能が入っていて、年回忌の時にお互いに自分たちの身内であるとか、親戚であるとかそういうのを確認する場となっています。それが、たとえばおじいさんの十、三回忌をしますから、というように何ら抵抗なく、手紙、招待状も出せると思います。

それが全然なくなつて、今みたいな移動社会になって、ますます皆ばらばらになっていきます。それで、たとえ集合住宅があつてもその中は皆ばらばらでね、そうすると、何らかの契機に親族関係を再確認しようとする役割を果たし、その節目としては年回忌法要がひとつの役割を果たしていると思います。

アメリカとかで、どんどん自分からネットワークをつくっていった、人間関係ができてくる。また、子供は子供で別なネットワークをつくれればいいんだという。奥さんと夫であっても別のネットワークでいいんだという。そういうふうには日本社会はなかなか進まない。

そういう意味では、自前の思想で自分は何なのかというところまでいってない。自分は何なのかといった場合に、親だとか先祖だとかがまだ強い。そこで年回忌法要で自分はこういう存在であるかを、親族の中で、自分のイエはこういう伝統であるとか、親戚の人はこういう職業だとかの結びつきの中で自分を考えてしまう。

また、アメリカ式の自前の思想でいいのかというと、アメリカ自体も一方では崩れている。近代以降、アメリカなりヨーロッパなりがモデルとなつて、脱亜入欧といつてアジアは蔑視し、ヨーロッパをモデルにして生きてきた、頑張ってきた。ところが、どうもそのモデル自体も崩れてきている。そうすると自分たちで結局モデルをつくらなくては行けない。究極的なモデルの意味づけを果たしうるものとして、宗教が一番担いうるものだと思う。

に戻そうではないかということです。

孝本 そうなんです。たとえば釈迦の教えとか、日蓮の教えとかがあり、その一方では日本人の持っている世界観がある。釈迦の教え、日蓮の教えそのものの理念なり教義なりイデオロギーを尺度にして、そこに全部引っ張っていく方法がひとつにはあると思います。

しかし、日本の場合、そこに民衆がいて自らの民俗信仰世界と、理念としての教義上の教えとの間を常に往復しながら、片方にあまりに行き過ぎた場合、葬式仏教などと批判が出て、少しこれをシフトする。また、元に戻るといふ繰り返しをしてきた。どちらかを全部抹消してしまうこともできない。もしどちらかを抹消してしまうたら、教団は成り立たない。この間をどうやっていくのか。日蓮の教えの原理を一方の尺度とした場合、もう一つの尺度として民衆がそれを受容した尺度があると思います。その両方を射程に入れて、今後のあり様は考えられなければならないと思います。

栗原 現在、弊害がみられるとしても、仏教が民衆の心を表現してきたという面、それによって仏教が民衆の

いますし、それにより安定した世界観をつくってきた面もあると思います。

それを受け入れてきたわけです。しかし、それが現実の葬式仏教というように、非常に問題が噴出してきているのは事実だと思います。成仏というひとつの思想を受け入れて、葬式仏教の側面を変えればいいのか、それとも成仏の側面まで問題にするのかということです。私は成仏の側面まで変えていって、そこまで日本人の今まで培ってきた世界をどのように変えていくのかといった展望を開いていく、積極的方法を模索しているのだと思います。そこからひとつのモデルを提示していくようにしたいほうがいいと思いますね。

葬送文化の今後

栗原 『友人葬を考える』でも、葬儀の本義を忘れた現状に対する批判というのが根底にあります。そもそも葬儀というのは人間にとって何だったのか、本義以外のいろいろな付着物がついてきて弊害となっているのであれば、それらを全部取り除いて、もう一度本来のあり方

中で生き延びてきたという面は確かにありますね。

孝本 その場合、救済という側面があります。日本の場合の成仏はある意味で救済ですね。それが生前に救済されているというシステムをつくる方法があります。しかし、成仏したのかどうかをどのように確認するシステムをつくるのか。それはできないんだと思います。たとえば学会の教学試験で百点とったら成仏しましたというわけにはいかないのではないのでしょうか。これは個人の救済という側面です。

またひとつは共同性です。だんだん社会が私化していく中で共同性をどのように構築していくのか。従来はイエを単位にした親族共同体、地域社会があつたが、それも崩れていく。死をむかえた場合、死者を取り巻く家族や親族を苦しみから救っていく役割が、共同性を持つているところに覆いかぶさってくる。それをどうしていくのか。その場合に、友人葬が担うというのもひとつの解決法だと思います。救済と共同性をどう保証していくのか、大きな課題です。

これから宗教が生きていこうとすれば、戒名やお墓を

ほとんど売り、それを財源にして、教団を維持していくことは可能だと思いますね。たとえば、創価学会式の戒名をつくり、それを売れば教団は維持できますね。だけど、それでは解決にはならないでしょう。日本人の持っている世界観なりを射程に入れて、新しい葬儀のあり方を考えていくという方向でない限りは、一時的危機改革論にすぎない。

栗原 そうですね。現在創価学会がやるうとしていることも、技術的な問題だけではなくて、葬儀の本来の意義にたちかえって、現代にふさわしい新たな葬送文化を創造してゆきたいということです。日本の基層文化に由来するものでも外来のものでも、よいものであれば残してもよいし、それを世界にアピールしてゆくことも考えられると思います。

孝本 日本の外来思想の受け入れ方は、儒教にしても、仏教にしても積極的に受け入れてきて、自分なりに解釈して日本的体系を創り上げてきた。釈迦の考え方がこうだから釈迦の考え方に戻れとか、日蓮の考え方に戻れといってもそうはいかない。

百年ぐらいかかるでしょう。平安末から浄土の考え方が入ってきて、浄土思想が安定してきたのが江戸の中期ぐらいですから。それを変えるとなると、いろいろしなければいけないでしょう。日本の社会でどういうモデルとなるのか、日本以外で普遍化できるのかどうかですね。

『友人葬を考える』のあとがきに、「世界で日本が孤立し、日本たたきが起ころのは、われわれ日本人や日本社会のあり方に問題の要因があるのだということを、葬儀をめぐる問題を検討していくなかで、改めて痛感した次第です。このような日本を再生させ、世界に通用する、または世界が喜んで受け入れてくれる新しい文化を発展させる大なる任務を、日本の宗教は担っていかなくてはならないでしょう。なぜなら、宗教は、日常生活の中で無批判のうちに受け入れている自分たちの価値や規範、習慣などを、見つめ直し、再検討していく『反省の働き』を、その中心で重要な機能としてもっているからです」(二二七―二二八頁)とありますが、こうしたことが要請される時代だと思います。

栗原 新たな葬送文化の創造のためには、責任をもつ

栗原 そうですね。現代を生きるという立場で考える必要がありますね。

孝本 たとえば、本来のお葬式というのは、お坊さんは形だけで、超世俗の人として戒名をつけ、穢れを払う力をもっているという側面があつて、それで地域社会では安定していた。だけど、戒名をつけない、お坊さんが出ないとなると、では、穢れを誰が払うのが問題になりますね。踏み込んで儀礼の形を整える必要が出てくる。

世界の中でモデルがなくなってきた。伝統的なイエとか共同体モデルも崩れてきたのだから、自分たちでつくるしかないと思っています。今さらアメリカ的な生活スタイルがいいとはいえないです。犯罪率も日本よりはるかに高いですし、それをモデルにできない。今まで日本社会がつくってきたマイナスの面は戒名にしても葬式仏教化にしてもありますが、救済なり共同性というものを持つていたのだから、それを選び分ける中で、新しいモデルを模索していく以外に仕様がいないのではないでしょう。非常にしんどい仕事であるとは思いますが。

かりに創価学会が友人葬を定着させていくとしても、

て思索と実践を積み重ねてゆくことが必要だということでしょうか。本日は、長時間にわたり貴重なお話をいただき、大変にありがとうございました。

引用文献

- (1) 東洋哲学研究所編／中野毅・小林正博・栗原淑江・木暮信一・藤田尚則『友人葬を考える』第三文明社、一九九三年。
- (2) 佐々木宏幹『仏と霊の人類学』春秋社、一九九三年。
- (3) 島田裕巳『戒名 なぜ死後に名前を変えるのか』法蔵館、一九九一年。
- (4) オームス・ヘルマン『祖先崇拜のシンボリズム』弘文堂、一九八七年。

(こうもと みつぎ・明治大学教授)
(くりはらとしえ・東洋哲学研究所研究員)